

## 會



## 報

1957年9月

194

日本山岳會

木暮理太郎翁  
の 碑 前 祭☆ ☆  
神 谷 恭

の用意はあつたので役員会の折松方氏に碑文をお願いし、同時に会員松本(熊)氏に製作を依頼してあつたところこの程立派に完成した。この建設をかね既報の如く去る七月十四日第三回目の碑前祭を行うことになった。前日の九時半浅川発の別車で出発したが、前月から降り続いていた梅雨空は漸く晴れ勝沼へかかる頃には南ア前衛の山々姿を現わして来たので一行の心もはしやぎ、夫人と共に参加された深田久弥氏を囲み車上談山は果しなく下車駅垂崎へ着くまでは昼食をおわり、満員バスに

去る廿五年五月六日金峯山麓金山に翁の胸像が建立されてから六年目の、昨年五月七日は翁の十三回忌に当るので、同年六月六日同地において碑前祭が行われ本会から日高副会長始め多数参列した。その席上建設委員会を代表して筆者より本会へ永久に保管方を一任されたので、金山唯一軒の居住者有井氏に管理をお願いしたのであつたが、その際同家より喜んで御引請けするが一般登山者のため翁の人となりを書いたものを建てて欲しいと要望があり会としてそ

ゆられて増富着二時半、ラヂウム含有量世界一と自称する鉱泉宿もホテル風に改築され、われわれには向ぬが本谷川溪谷の路は鉾山までハイヤーものれるそして潤いある良路になったこととは有難い。今年こそ参加したいと木暮未亡人は三鷹から多摩墓地まで足馴しまでされたが、万を一を懸念しておやめになったことはまことに残念であつた。来年こそ御出で願いたいものである。金山着四時半有井館で一服の後陽もまだ高いので碑文をレリーフの所まで担ぎ上げ、夕刻までに、建設を終え漸く肩の重荷を下ろした。真白な碑文は周囲の緑に調和して神々しく一同碑前に額づく頃ボツ／＼降つて来たので宿にくつろぎ、交替で入浴をすませ楽しい前夜祭に移る。

膳の上には宿の心尽しの山菜料理に各自持参の御馳走がくりひろげられ、ウイスキーの小杯が盛んはめぐり始めるといよいよ咄しははづみ、木暮翁の思い出が次々と語られ、翁にもつとも親しくして戴いていた自分は胸のせまる思いを禁じ得なかつたが若い人々にもよい感動を与えたようであつた。十四日碑前祭は山行の都合もあるので朝飯前に繰上げ、六時露にぬれつつ碑前に登り筆花を拂げて一同黙禱をおわり、筆者より碑文建設までの経過報告と将来の希望も述べ次に深田氏は翁が大先輩としてわれわれに遺された偉大な業績を讀んで種々思い出を語られ、最後に同氏の著書「ヒマラヤ——山と人——」を碑前に捧げられたことはまことに意義深く、実に最後までヒマラヤの研究に情熱を持

つづけられた翁にこの上ない供養であつてご遺族のお喜びも察せられ、思わず目頭の熱くなるのを覚えた。式が終つて朝食後の山行は予告の通り瑞牆山へ七時半に出発することになったが、沼井、野口両君は特に金峯山を希望されたので途中まで同行する。一行は両君の外深田夫妻、大貫、富沢、中村、渡辺、植山、田村、近藤、神谷の十二名思いがけぬ好晴に恵まれアヤマ咲く高原や白樺を交えた水槽の樹立の中、実に静かな林道を一時間程登ると樹林の間から怪奇な瑞牆の岩峯が望まれる。それから廿分位で金峯との分れみち富士見平で一服、ここで沼井、野口両君及大日小屋を管理する富沢君と別れて秩父らしい黒樹の中を北に辿り、再び瑞牆の眉を庄する絶壁を仰いで急坂を一気に天鳥川に下つて、更に密林の中を登ると三丈位真二つに裂けた巨巖のところから石南木の多い急坂を攀じて幾度か休憩をくりかえし遂に大岩壁の頂上に立つたのは十一時半で、金山から正に四時間も費したわけである。眺望は晴れてはいるものの雲霧の去来烈しく、楽しみにしていた南や八ヶ岳方面は白雲に包まれ、唯僅かに金峯と小川山を見たにすぎなかつたが、昼食後悠々二時間余トカゲを楽しんで下山出来たことはうれしい思い出となつた。

午後四時金山に下つて来ると山梨支部の三井氏がNHK録音班の方々と先刻からわれわれ一行の下山を待つていて下すつたと知り大山に恐縮し早速求められるまま木暮翁とレリーフについて約十分お話しさせて頂いた。

次に今回建設の碑文は縦式尺横式五寸の木枠に鉄板張り白地に黒字ペンキ塗り仕上げ、文字は約一寸角十五字詰十五行に登山家としての翁の人となりを、あますところなく煎じつめて書かれた松方氏の御苦心に對しましたこの製作費全額を負担して戴いた松本氏に深く感謝の意を表する。碑文は次のとおりである。

『秩父の山々について多くの記念すべき研究や紀行を残した木暮翁は登山の実践の面でも、秩父の先覚であり開拓者であつた。登山家としての翁の経歴は明治廿年代に始まり、以来半世紀の長きにわたつた。不屈にして剛健質実の精神は翁の生涯を貫くものだが、それが翁の登山にも独特の風格を与えた。山に對する熱情、経験、教養そのいづれにおいても翁は一世の大先輩の名にふさわしい存在であつたが、ヒマラヤ研究において木暮翁は、その業績によつて永く記憶されるのである。昭和十九年歿、七十一才であつた。』

右の碑文とは別に胸像建設の直後、委員の間で翁の経歴を彫刻した銅板の取付けを念願して、未だ実行に到らずまことに遺憾にたえない。今後翁の業績を永く伝えるためウエストン祭と同様、毎年地元山岳関係者のご協力を得て碑前祭をつづけられたいと希望してやまぬ。終りに重荷を賑わす碑文の運搬から建設までご協力頂いた日本石油山岳部の中村、渡辺、植山三氏に厚く敬意を表したい。

# ダーズリン②

—ヒマラヤの展望台—

三田 幸夫

## マウント・エヴェレスト ト・ホテル

マウント・エヴェレスト・ホテルは昔と殆んど変つていないようだった。フロントで宿帳にサインをしている私をしげしげと眺めていた番頭が、あなたを知つていましてと慣れ慣れしく話しかける。私が最後にここを訪れたのは三十年も前のことなのだからそんなはずはないだろうという、いや、私はこのホテルにはもう四十年近くも動いていて、もとはよくお客さん方をタイガーヒル等へ案内したものです、と仲々愛嬌が好い。どここの宿屋でも、お世辞にしろ顔見知りらしく振舞われるのは悪い気持のしないものだ。

によるとこの二日前のカルカッタの温度は、最高二九度、最低二二度、ダーズリンでは最高一四度、最低五度であつた。ホテル全体は寒々として、人気も余りないようだったが、ボーイの話では、大満員で、客の半分くらいは米国人の観光客だということであつた。ロビーの一隅の客一人いないバールで、ハイボールを一杯飲んで食堂に入つてみると、四分の一位の入りで、婦人や老人客は皆宿の毛布を羽織つてゐるのは驚かされた。さすがに山の宿の気安さである。もつともまだシーズンオフの故もあるのだろう。各食卓にふんだんに飾られてゐる大きなしやくなげの真紅の花が眼にしみる。ヒマラヤの、そしてダーズリンの自慢の花なのだ。

食後、帳場へ出かけてテンジンの家に電話をかけて貰う。生憎留守だったが、夫人の話で、明朝十時頃来て戴き度いとのことであつた。テンジンは、エヴェレストの英雄になつて以来、すつかり世界的の名士になり、いつも訪問者が多かつた、一時は面会も仲々容易でなかつたという番頭の話であつた。帳場の傍の売店には、テンジンの色々なボーズをした絵葉書が売られており、中で私の眼を惹いたのは、この春インド訪問の途中ダーズリンを訪れたチベットのダライラマと対座している写真であつた。

ダライラマといえば、一昨年、彼の兄のトゥグテン氏(Tutuen)が、中共のチベット進駐後追われて米國へ亡命の途中、東京に暫く滞在して本願寺の厄介になつてたことがある。その時、矢張りネパールから日本のコッテージ・インダストリーを研究に来ていたネパール政府のラトナ君が同氏を連れ、私の会社を訪れてきて両三度話合つたことがある。

同氏のことは、ハラーの「チベットの七年」(近藤等君訳)の中に、わが友ロブサン・サムテンという章に書かれてゐる。ダライラマの唯一の話相手であり、ラッサのポタラ宮殿内でも特異な権力の保持者であつたらしい。番頭の話では、そのトゥグテン氏が昨年来ダーズリンに滞在中で、弟のダライラマとひそかに会合してゐたという噂を聞いたが未だ姿は見えないという。信偽の程は解らないが、本当に滞在中なら、私も一度会つて色々な昨今のチベットの事情を聞きたいと思つた。兎に角すで中共の支配下にあるダライラマ一家が離れ離れの生活をせざるを得ない運命はまことに気の毒だ。

シリシ茶の香りと味は格別である。

夜が明けないうちに、身仕度も早々に部屋を出る。暗い廊下の所々に毛布をすつぽりかぶつたチベット人やネパール人の女が蹲まつている。タイガーヒルへヒマラヤの御来迎を見物に行く客の起きるのをじつと待っているポーター達だ。

ホテルの玄関を出ると、空はもう少しばかり白みかかつてきた。カンチンジャンガの上部は桃色にうつすらと輝き始めている。太陽が高くならぬうちに一刻も早く全容が見えるところまで急がねばと足を早める。早朝のダーシリンは清々しく、舗道には塵一つなくまことに清潔だ。こんな早く人通りもないうちから掃除夫がせつせと道を掃ききよめている。その道を駆けるように飛ばして三十分足らずでオヴザ・グエトリ・ヒルに着いた。ダーシリンの街中を、一番カンチンジャンガの好く見える有名な展望台である。

ここからのカンチンジャンガ山群の眺望は誠に素晴らしい。眼下にはランギットの溪谷が一きよに六千呎も深く切れ込んで北に続くシッキムとの国境をなしている。それから幾つもの前山が順次重なり合つて奥へ続き、最後にカンチンジャンガ山群の水の壁が立ち上りだかつている。その向側がチベットだ。シッキムの内部はその山また山で覆うことは出来ない。

この大観が眼前何一つ遮るものなく、殆んど水平線近くの低いところからカンチンジャンガの頂き、二八五六呎まで一望の下に

見渡せるのだ。この景観は、人界からなし得るヒマラヤの最も大きな展望といえるであろう。

太陽が昇るに従つて、氷の峯々は桃色から急に黄金色に輝き出す。山によつて様々な岩の色と氷の部分との配色が形容の出来ない美観を作り出す。

雪線以下の部分は、濃い線にどつしりと落付き、その附近まで谷を埋めた雲の海がじつと動かない。

今、私の立つている所から主峯カンチンジャンガまでは直線距離にして四十五哩も離れている。それなのに、その山の強い激しい息吹きが胸の奥に突き刺さるようにひしひしと迫ってくる。久しく会わなかつた何か形容の出来ないつかしさに心はうづく。

この巨峯群から南に長く一肌山の稜がダーシリン近くまで続いている。シッキムとネパールとインドの国境のシンガラ山脈である。その山稜を辿つて毎日この山群を眺め暮した旅のことを思い出す。ちようどドイツの登山隊がカンチンジャンガに対して果敢な登攀を試みていた頃のことである。自分達にとつて、あんな大きな高い山を試みる機会がやつてくるだろうかと考える続けた。しかしながら、せめてあの直ぐ下の氷河の辺りまでなら勿論自分独りでも辿りつけるだろう。耐らない焦燥と激しい誘惑を感じながら、手を凍らせてスケッチブックにその山々の細いひだや氷河の模様を克明に残そうと苦勞したのも三十年も前のことになつてしまつた。

そんな昔のことを思い起しながら、ちようど持ち合わせたケネス・メーソンの *Abode of Snow* (最近ヒマラヤという題名で田辺、望月両君によつて翻訳された)の扉の頁の空白に今またカンチの姿を追つてスケッチを試みたが、老眼鏡を外したりかけたり、今の私にとつては、そのペン跡はまことにたゞだつた。

やがて、ランギットの谷を埋めた静かな雲の海は音もなくざわめき、波立ちながら上昇して少しづつ空高く消えてゆく。四辺は既に明るい朝に交つていた。そして、私はもうこの石のベンチに一時間余りも坐つてゐることに気がつく。

後のラマの祠の中からはだみたま僧の読経の音がのうく聞えてくる。その声に合わせるようなのろい足取りで、一人のネパール人の女がお百度を踏んでいる。稚い頃、祖母に連れられてお詣りした田舎の社で見た風景がなつかしく甦がえってくる。

祠をとり囲んで建てられた幾十本の祈りの長い旗はだらりと垂れ下つたままであつた。私は幾許かのお賽銭をあげ、黙禱をささげてこのオヴザ・グエトリ・ヒルを降つた。

**ジョセフ・フーカールの観察**  
私が始めて、このダーシリンから見たヒマラヤの大観について識つたのは中学の初年級のことだから明治四十年直後の頃である。落合直文編輯の国語の本にあつた一章と記憶しているが、日本人が書いたものか、外国人のものを翻訳したものか、今は勿論これをトレースする術もない。少年の私の心

に残つている程それは美しい描写であつたに違いない。特に山の色が刻々に変化してゆく美しさを描いた部分を一番記憶している。

そして、私自身成人して登山に興味を持つようになり、実際にこの山々を見た人達からその話を度々聞く機会があつた。その話の中には、壮麗な美しさと、高さ大きさにまつて誇大なまでの描写が多い。が、それを見た人々にとつては、その時々々の情況によつて確かにそう感じることがあつたに違いない。

冬の好天続きの時季を除いて、ダーシリンは雨や雲の日が多く、そんな時、運の悪い人は数日間も滞在して一度も山の姿を見られなことが往々ある。しかしそんな時でも、雨上りの後、雲間に突然ぱつと氷の峯が顔を出すことがある。それが途方もなく高い所に感じられるのである。見上げる程の高い天空にそれが見えるように感じるのだ。

ダーシリンの高さは七〇〇〇呎、カンチンジャンガの高さは二八五六呎だから、その高度差は二万呎余になるわけで、確かに大変な高さである。富士山の上に穂高を重ねる程の高山を仰ぐことになるのだが、距離が四十五哩も離れているのだから、実際にはその仰角は極めて僅かなものである。とはいふものの、四十五哩といえ、東京から国府津までの距離だから、もしあの辺に富士山の倍以上の山があるとしたらどんな高さに見えるだろう。

そして、私は、百年余も前にこの高峯群の正確な観察を試みてい

る入のことを披露しておきたい。それは、英国の有名な自然科学者、ジョセフ・フーカールのことであり、シッキムヒマラヤについてのパイオニアであつた。その彼が、一八四八年にダーシリンを訪れた時、カンチンジャンガ山群について次のような面白い観察をしている。

「始めこの立派な全景を観る時、その異常な高さによつて生ずる印象は、峯々が雲を突き破つて空中にそそり立つといつたものだが、そのような叙述は一般にアルプスの同様な風景に用いられるものである。しかしながら、観察者は、もう一度見直してみると、一番高い峯でもそれは水平線上甚だ低い位置を占めていることを発見するのである。カンチそれ自身すら観察者のレベルから僅か四度三分の仰角に過ぎない。機械の力を借りぬ場合、肉眼による角度といふものは甚だたよりないものである。(この角度は優秀な経緯儀で彼の測定した正確なものである)」

彼はそこで、更にシンチャールからの眺望についての記述を試みている。シンチャールの直ぐ上に現在タイガーヒル(八五〇七呎)の名で有名な展望台がある。ダーシリンから約六哩離れており、ここから快晴の時、エヴェレストやマカルーが見える。

この眺望は、ダーシリンより千呎程高いシンチャールへ登ると更に広がる。その頂から八四哩距つた北東にチョモラリ(二九二九呎)の頭がコーラ山脈の雪稜上(十一頁につづく)



## アメリカの遭難

徳久珠朗

先日読んだアメリカ山岳会の Safety Committee から出している "Accidents in American Mountaineering" の中にアメリカの遭難についての統計が示されていたので簡単に紹介してみたいと思う。

最近の日本の遭難と対比することによって、日本の山の特性把握と、その遭難対策とに少しでも益すれば幸いである。

なおこの報告は毎年出されており、今あげるものは五十二及び五十三年のものである。ここであげてある一九五二年度の遭難は三五件で(死亡)資料は新聞、国立公園、アメリカ山岳会員及他山岳会員の報告によるもので信頼度は高く数的にも網羅しているといわれている。

① アクシデントの地理的分布

一九四七—五二

Appalachian Mts.—(New Eng.—N.Y.)—Southern

Colorado Rockies

Montana Rockies

Utah

Teton & Wind River

Arizona & New Mexico

Sierra Nevada

Cascades—Oregon

—Washington

Olympics—Washington

3

練習場(全地域)

② 発生場所

岩場

雪上

不明

③ 登行時または下降時

登行時

下降時

不明

④ 直接的原因

岩場でのスリップ

ハンドホールド剥脱

落石

懸垂失敗

雪上または氷上のスリップ

クレヴァースに墜落

グリセード失敗

雪崩

落雷

ルート逸脱

サイル切断

不明

⑤ 間接的原因

単独登攀

能力過信

日没

⑥ パーティの大きさ

一人

二人

三人

四人

五人

六人以上

不明

⑦ 年令別

15~20

21~25

Younger or college age

38

13

30

3

6

21

39

8

27

18

31

17

12

14

9

2

3

6

5

13

2

3

5

14

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

26

30

31

35

35

3

4

2

3

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

は他にも大いに役立つものとして紹介している。

### ・The Ascent いかなる登攀も

明かな危険を冒してまでするに値しないし、また一人でも無鉄砲なものがあるなら成功と判定出来ない。賢明な退却は危つかしい勝利に優る。

### ・Judgement 他に

君自身と同様に他人の能力と限界を知れ、場所の天候の、装備の限界をしれ、良き判断とはこれらの限界をすることである。

### ・Margin of Safety スピード

に関心を持って、安全について妥協するより、私は大体それが出来ないという方が賢明である。

### ・Companions 安全を

リーダーの命令に対する互の尊敬がなければならぬ、安全な登攀の鍵は連帯と共同にあり、競争にあるのではない。決して独り合点して登るな。

### ・Belaying 良き

良きベレイは安全な登攀に最も重要な技術である。一人の人間の命が君の手の中を通って行くのだ、経験がダイナミックテクニクの価値を示すだろう。そして自分自身を守る者が他人を最も確実に確保する。

### ・Condition 肉体的精神的コン

ディションはクライマーとしての君の考えに大きな役を果たす、困難な登攀はスタミナを要する、もし出来ると思つたらやるな、他日を期せ。

### ・Climbing Ability 良き

フォームをしり練習せよ、これにはパティの組織、信号、ザイルワ

ーク、体の調整、懸垂、その他エキスパートの資格たるあらゆる細部にわたる岩氷雪の技術が含まれる。

### ・Leadership 各人は安全性を

たため、極端なことや、華々しさをさけ、リーダーに従うようリーダーシップを学ばせよ。そして初心者には特に良い伝統をもつた団体と一しよに登るよう注意せよ。

君の命は君自身で救うべきである。登山においては墜落の前におごりがあることを銘記せよ。

その他、シカゴ山岳会、コロラド山岳会、コロラド山岳会、シアトル山岳会などについての活動説明がある。

以上が非常に簡単な紹介である。これを見て気がつくことは、遭難に対する情報組織、登山者に対する階層別、山岳会の登山信条等いろいろ考えられるが、わが国のように特に遭難の多い国はこのように対策について、早速に考慮すべきであろう。

## デリーにて

田口二郎

近着の日本の新聞をみると、ついに三十四度との大見出し、当地はモンスーンに入つたといえ連日百度で、六月七月の百十度よりはましだという程度、先日アグラのタダマル見物に一日車を飛ばしたが、仲間と二人で二本づつテモスの水を飲んだが小便一滴も

出なかつた。だから暑中見舞などといつても本心は、うなぎとビールでなくさめてもらいたいところ。ご承知の通り当地はドライで、酒は自分の部屋にひきこもつてしか呑めない、しかし苦あれば楽しみありで、六月中旬、デリー北方百六十哩のマスリというヒルステーションに出かけた、シムラとならんでの避暑地で、カシミヤには遠過ぎる人達が休をとつてやつてくる。たつた一晩泊りだつたが灼けつくパンデヤップの平野から車で六千尺登つたら、もう冷やりとした山の空気でホテルの窓を開くと、バンダパンチ(二〇・七二〇呎)ガンゴトリ(二一・八九〇呎)ケダルナート(二二・七七〇呎)パドリナート(二三・一八四呎)が東にむかつて立ちならび、一番遠い所に望遠鏡のぞくと二本の雉のような日くみたら山がのぞかれる。調べてみたらナングデヴィ、それでカメットはトリズルは、またナングコットは、とそそ翌朝、ロバで七千尺の小山に登つて探したが何れも右にあげた連山にかくされ、亦遠すぎて見られなかつた。ガルトツヒマラーの南面はそげるように落ちていて、やつぱりちよいとそこらには無い山々だ。白い山を見たは、仕事など一擲して、高い雪で寝たいたまらぬ誘惑を感じました。ここまで来るとネパールは近いはずだが、宮仕えの身では東京にいるのとさして変らぬ。しかし当方が動かなくても、さすが隣国で、先日ホテルのロビーで駄弁つていたら、フト見たような男が通

る。カトマンズのクリシナ君とはさすがに両方でおどろいた。改めて会つて五、六時間を懐旧談やネパール近情の話で一瞬のうちに過した。ネパールも、北京に亡命したシンが帰国大命をうけて組閣中、印度に刺激されて五カ年計画をやるという。クリシナは家内工業の長官で八百名の若者を諸工芸に養成している、翌日、ネパール大使の処に二人で遊びに出かけ、大使から早く次の遠征を出せとアジられた。実は二日前、吉沢大使がネパール大使のパーティにつれて行くといわれるので出むき、紹介されると、先方は「貴君は自分を忘れたようだが自分は忘れな」と云う黒い顔をじつと見ると、かつてマナスル踏査隊、第一回で散々にお世話になつたカルカッタのネパール総領事その人だつたには、いささかおどろいた。クリシナはジープで四日かけてカトマンズに帰るから、一緒に行くという、大使も直ぐヴィザをやるといふがこちらは残念ながら、そういうわけには行かない。今秋から春カトマンズでの再会を約して別れました。カトマンズにはとうとう印度からの自動車道路が開かれた。アメリカの観光客が飛行機をチャーターして盛んにやつて来る、遠征の度にウィスキー二打になった。ローグダールシャヤンが立派な家を新築した、シャハ夫妻は益々ふとり、ますますピンポンに打ち興じている。日本に來たラナは相変わらず仕事嫌いでうちに寝こんでいる。ヒマラヤ遠征に政府は、八千米級はいくら、七千米級

はいくら(たしか五千)と登山税を課するらしいが詳しいことはカトマンズから手紙で知らせよう——という具合に話は尽きませんでした。ご依頼のゴザインタンは、ネパール大使はとても無理だという。他国への先例になるからと、クリシナは、これはカトマンズでなければウチがあかない問題だ。しかし一頃と違つて近頃のネパール政府は、国際政治に敏感になつてゐるからとてもむづかしいのではないかと、いつていた。この秋、若しカトマンズに行けば今度の外相は小生の知つてゐる人故、はつきりした話が聞けると思ふ。当地に來てから、色々な遠征が行なわれた。マチャブチャリやナングデヴィ。スイスは来春、ドウラギリに帰つて来る。当方何くれと追われて、いちいち訳するわけに行かないので、新聞の切抜きを同封しますからご利用下さい。それから小生、会社から三カ月の命で來たが、一年いとのことになつたので、山岳と会報、御面倒ながら、岸本商店に送つて頂き度、そうすれば空便してくれまさら都合がよいです。皆様によろしく。(成瀬氏あへ)

Jiro Taguchi  
Hotel AMBASSADOR  
NEW DELHI

### 第一七七回小集会

第一七七回小集会は九月三十日午後六時三十分から体協大会議室で木村秀緒氏の「チベット旅行談」があり盛会であつた。

# シエルパと In Highest Nepal

成瀬岩雄

シエルパがどうしてあんなに気持ちのいい人間なのだろうかというのはマナスルのどの隊員からも聞いた。或いは新入部員を迎えるような気持ちだったとか、忠実な番犬そのもののようなとか、往年の佐伯宗作みたいだとか、各人のシエルパの話は楽しいものであった。また長らく山に入っていると、ついわれわれも口論したりすると、ともあるがあのシエルパ達が如何にも嬉々としてはたの見るのも羨しい程、仲好くやつているのを見るとわれわれの行動が恥かしくなる。われわれの連れれた三人のシエルパの中の二人が或時仲間の荷物の中に悪戯して重い石をソット入れて置いたのが、フーイいつて登つて来た時に相手にそれがバレ、その時の三人の朗らかに笑う、喜び方を見て、むしろ俺だつて石を入れたらたつてよかつたと思ふ位だったとか、何十年とシエルパと一緒にヒマラヤの諸々方々を歩いている内、チョット景色のいいところに来ると必ずシエルパが自分達の故郷のソラ・コンプミだいたいというのが耳に残っている

ので、一度は是非行つて見たいと思つていたし、それに永年の友、アンターキーに再会出来る楽しみもあつたのでこん度の一九五一年のエヴェレストのリコネッサンスに出掛ける気になったのも、実はその動機の一つだなどといっているのはシブトン、バラサーブの言葉である。或るキャンプファイヤーの一夜スエーターの下に、お腹の所をありつたけの着物を膨らませて、満面笑みを浮べた顔に一生懸命、お腹をさすりながら頻りに手真似足真似を交えて不可解なヒンドスターニーで語る言葉はどうしても判らなかつたが、やつと判つた。彼の女房はちようど今頃ダーシリんで子供が生まれるころだというのだ。ギルギットに着いて見たらチャーンと無事安産の電報が来ており、後日イギリスに帰つたら彼の、この一人増えた New Family の写真も送つて来たなどといっているのはスコット、ラッセルのカラコルム山中のシエルパとの楽しいキャンプの一駒で、この話題の持主はマナスルに二度の御供をしたサーダー、ガルツェン・ムクジュエーの話だ。エヤーマットレスや天幕を建てるのから焚火の火起しまで喜々としてやつてのけるシエルパ連中におかれれば顔負けの形、むしろわれわれの隊は一そら、"The Himalayan Education of ten Americans by their Patient Sherpas" といった方がよいだろうといっているのはアメリカのマカル隊の隊員の言葉だ。僕自身もダーシリんでアンターキーに会つた時には肝心のヘンダーソン夫人との第三次のマナスル隊の

サーダー決定の話など、正直のところウワの空で、暫時われを忘れて、シブトン、アンターキー、アンターキー、シブトンと、数限りない、二人の逸話をひそかに心中で復習したとして、独り悦に入つたのが、あの時の偽らざる心境だつた。最近来たノーマン・ハーディーの "In Highest Nepal" は、要するにもつと積極的に自らシエルパの村に入り込んでシエルパの家に泊り、食物でも何んでも総て彼等と同じ生活をした時のことを記述したものである。一九五四年にヒラリーのバルン隊の一員として活躍した後、チャールス・エバンスと共にナムチュ・バザールに約一カ月残り、その地の風俗、習慣に興味をいだいたのが今度の動機になつたもので、五六年にはそのタフな活動力を認められてエバンスの副隊長としてカンチエンジュンガ隊に召かれ、登頂の栄を担いだ彼は、その時も終始、テーブルコーダーを背負つてシエルパの言葉や歌をレコードしたという。

その後、ベースキャンプでカンチ隊と別れてモンズン中をシエルパのウォルキン、ガルツェンとの三人で約一カ月掛つて、シエルパの村、クムジュンに帰り、夫人一人村でシエルパ生活をしている間、著者は友人のマクドナルドとホングーの谷やチムラン峰の山麓を偵察していた。すでに五四年にも来ているので村で顔見知りも沢山の山あり、至る所で、戸毎に歓迎されるのである。しかしお祭に出掛けるにも何分カンチのベースキャンプ以来の着のま着のままでからシャツやズボンは穴だらけで困っている、ウォルキンの女房から新しいシャツ——それは彼が先年、亭主に与えたものだ——を着せて貰つて、出掛け、坊主の間に挟つて笛を吹いたり、太鼓をたたいたりし、坊主が経文の音調の高いところに来ると、脇でチョイト突いてくれると笛を高らかに吹いたりして喜んでるところがなかなか面白く書かれている。ヤクの乳を絞つたり、水汲みの桶を担ぎ出したりして、それは女のする仕事で女房が怠け者だと近所の評判になつては困るから、それだけは止めてくれなどたしなまれたりするところもある。

シエルパ族は概して手足に毛の生えているのが少ないので、自分みたいにショートパンツで歩いてゐると、面白がつて足の毛を引張り来る奴がいるし、或る日、路端で昼寝をしていたら、突然、女が三人、自分の胸や、顔や、足の毛を引張廻しているの、こつちも、相手の弁髪を引張り返して騒いだなどというに至つては、完全に村の人気者になつてしまつていたようだ。モンズン明けには彼の夫人と友人一人がイギリスからやつて来るのでカトマンズまで迎えに出掛け、また三人で引返して村に帰り年末までこの村に滞在し、ヤクの放牧を手伝つたりして暮している。例の猛烈に辛い、カレーのポテト・チャパティーを食つて卒倒せんばかりになつた夫人は頭から水一杯かぶせて貰つて正気に帰つた等という話もある。諺の郷に入つては郷に従えというのを忠実に守つたのだがと夫人は嘆息している。チャールス・エバンスとこのハーディーはウエールスの田舎にこの「シエルパの家」。ヤクの糞で隙間を固めたあの「シエルパ」の家を建て、そこでロッキンギーも作るのだそう。見取図(?)までのつてゐる。カンチのご褒美にイギリスによられたサーダーのダワ・テンシンとチャチャップはそれぞれロンドンの印象を行き交々人々が「誰も話し掛けてくれない村」とか、二人の土産話、一番村に持つて帰る度いと思つたのは「あの素晴らしい乳牛」「そんなもの、どうし飛行機で持つて来られるのだ……」などというのは如何にも、去年日本に来て議事堂をチャールンと間違えたガルツェンの話とよく似た愛すべき、シエルパの会話だ。僕はこの本を読んで、実はカンチの連中がダーシリンのシエルパを一人も使わなかつたという話を先年、ヒマヤンクラブのヘンダーソン夫人から聞いたのを思い出して、成程これなら、当然だと判つたような気がした。なおシエルパの村の生活についてはさきにボーディン夫人もナムチュバザールに滞在して "Visit to the Sherpas" なる書を著し、この邦訳は藤木九三さんがすでに脱稿され、近日出版の運びとなるはずだからついでに紹介して置く。これも必ずや、面白い書だと思ふ。

"In Highest Nepal" by Norman Hardie George Allen and Union Ltd.: London





## 会員通信

### 山 信

藤島 敏男

春のザラメ雪をたのしむのによ  
い五月はじめの数日を、二年つづ  
いて銀山平の山へ登つたので、今  
年は神の田圃小舎へ滞在、好日統  
きに春スキーも堪能し、小蓮華ま  
で登つたりしたのはよかつたが、  
下山の日は篠突く大雨で白馬大池  
駅へついたときは、なんと形容し  
ようもないほどの濡れ風。ルック  
サックの中の乾いたものと着換え  
たのは勿論だが、ズボンの代わり  
がない。やむなくビジャマのズボ  
ンをヒラ／＼させて帰えることな  
った。同行者の中には、いくら  
山からの帰えりでも白昼に寝巻は  
と言うものもあつたが、僕に言わ  
せれば、エヴェレスト登頂隊がネ  
パールの宮殿で、国王臨席の勲章  
授与式に列したとき、「隊員のビ  
ュウのとき、往復の旅に着ふる  
したビジャマを着ていたのは、ま  
ったく嬉しくなつた」とハントが  
書いてくるくらいだから、中央線  
の車中などは問題にならない。た  
だその日東京は雨がふらなかつた  
ので、家人が呆気にとられたのは

当然であつた。

六月上旬三条の湯から雲取山に  
登り三峰へ抜けた。僕が雲取山へ  
登つたのは大正七年十月のことだ  
から、ザット三十九年ぶり。生憎  
の雨で展望の利かないのは残念だ  
つたが、なにより僕を悲しませた  
のは頂上一帯残屑と空桁の散乱し  
ている惨状である。都会の場末の  
空地とまったく同じである。山を  
汚す運動やコンクリールが流行し  
ているのかも知れない。山名も神  
葛山と改めるべきだと考えながら  
山頂を辞した。かつては倒木に悩  
まされた、この尾根伝いも、箱根外  
輪山と大差ない径が通じている。  
そして眺めのよきそうな場所には残  
屑と空桁が足のふみ場もないほど  
登山の隆盛、ここにこにいたのか  
と、僕は無顔として三峰に向つた。  
七月は会員川喜田壮太郎君と飯  
豊山へ登る予定で、越後の伊倉剛  
三君（会員）を煩わしたが、うま  
く出合いがつかず、早池峰山に目  
的をかえた。今年から麓の岳部落  
までバスが入つて、岳へ朝の九時  
半に着く。早池峰を下して午後  
五時二十分まで待機しているバス  
に乗つて、花巻温泉へ戻るといふ  
寸法だが、そんな早業は寛東ない  
し、川喜田君も僕も日数に制限は  
なし、その日は滞在ときめて、こ  
の山合の静かな村の気分をたの  
しんだ。七月十日早朝出発、河原  
坊までは道があるが、あとはケル  
ンを探しながらグ／＼登るの  
である。沢をはなれるあたりから、  
咲き誇る高山植物の群落、こと  
にハヤチネウスユキ草の見事さ。  
天上の花園をゆく想いである。村  
から六時間余、正午山頂、墨々と

した巨岩の間に、花々々。背稜山  
脈は捲上る霧にかくれたが、東  
方はるか太平洋の大海原が、天と  
の境も見分けつかぬように眺めら  
れた。下りは逆落しに急だ。河原  
坊まできて仰くと、斜陽に岩の斜  
面は赤々と燃えるようだった。山  
上山下人影もなく、このよい山を  
ふたりきりで独占したよろこびを  
語り合つた。押すな／＼と混み合  
うより、やはり山は人ツ気のない  
方がいい。（一九五七年）

### 栗駒山

村上 金吾

——真湯から小安へ——  
栗駒山へは数回いつていますが  
真湯（しんゆ）コースは始めてで  
す。一ノ関発のバスは途中厳美、  
山谷、本寺、瑞山などを経て二時  
間半で真湯温泉につきます。真湯  
は祭時山（まつるべやま）の山脚  
に深く切れ切れ込んだ磐井川峡谷の  
底にある神秘境で、全く夏知らず  
の別天地です。紅葉の季節はなお  
よいといつていました。できれば  
一泊したいところですが私は日程  
の都合ですぐ出発して須川温泉に  
向いました。途中オーレン長根へ  
のきつい登りはありますが、ブナ  
の原始林がつつき、清れつな水場  
が至るところにあつて、概して楽  
な山道です。真湯から四時間位で  
須川温泉につきました。  
須川は栗駒山の北西側標高一、  
一〇〇米の高所にある温泉場で  
す。その日も七百人からの宿泊者  
でてんやわんやの騒ぎでした。廊  
下から鳥海山に沈む夕日が真正面  
にながめられました。場所はよい  
ところですが、いま奥湯からバス

道路を延長する工事が進められて  
おり、来年あたりは完成するとい  
つています。一方秋田県側も十文  
字からすでにトラックやハイヤー  
がきている程だから、一層交通が  
よくなることでしょう。従つて古  
いこの山を知っている者にとつて  
は、喜んでよいのか悲んでよいの  
かわからなくなりそうです。

翌朝濃霧について栗駒山頂上へ  
往復、上り一時間半、下り一時  
間位、展望のなかつたことは遺憾  
でした。一たん温泉に帰つてから  
秋田県側に向つて出発しました。  
これも始めてのコースです。須川  
湖（五万地形図の朱沼）を経て  
仁郷国有林のブナの樹海をあまり  
人にも逢わず、四時間も歩いて小  
安（おやす）峠に出て横手行のバス  
に乗りました。小安温泉も思つた  
より開けたところらしく、栗駒  
ホテルなどで十数人の女の子達が  
揃えの浴衣をきて立っているのが  
目にとまりました。小安コケシの  
本場でもあります。（三二・八・  
三四）

### 二つの旅

大貫 菊子

北海道旅行の途次大雪山に登つ  
てまいりました。最もポピュラー  
なコースを選びましたが楽しい素  
晴らしい山旅でした。山容の大き  
さは第一に驚異でした標高千五、  
六百の雲の平に咲乱れる高山植物  
の群落は一番印象深いものでし  
た。（七・三旭川にて）

× ×  
碑前祭の折皆様のお話しから木  
暮先生の偉大さを再認識すること  
が出来ましたことをまことに倅せ

に思つております。思いがけない  
好天に山行は大へん楽しいもので  
した。鮮やかな緑や愛らしい草花  
が印象的でした。（七・一五）

### アメリカの山

佐々 保雄

シエラクラブのベースキャンプ  
に二週間過して来ました。岩場で  
有名なミナレットレンジ近くのアイ  
アンタウンテン下、一万呎の所  
黒々とした岩山、輝く氷河、清冽  
な湖、美しいお花畑と、天国に遊  
ぶ思いでした。氷河に磨かれてテ  
ララに光つた岩の間にテントを  
張つています。一四〇人ほどの小  
供婦人老人を交えた大世帯で、一  
日置に山登り、間にはいろいろな  
アクティビティが催されました。小  
生は小供大供のために岩石のクラ  
スを持ち、家内は日本食の夕べを  
サービスしました。キャンブファ  
イアでは日本の歌もきかせられ、  
チョットした日本ブームでした。  
真黒になつて下山、今、黒人から  
黄人にもどりつあるところで  
す。八月十五日バークレイにて、  
（沼井宛 Lake and Carson Peak  
の絵葉書）

### 山岳五十二年

山岳五十二年に引つづいて、五十  
一年の編集を終り、すでに原稿は  
印刷所にまわしました。主な内容  
は「マナスの印象」植有恒「タ  
ルタランの死」ギド・レイ「ネバ  
ール紀行」成瀬岩雄「山岳会五十  
年史」沼井鉄太郎などです。年内  
発行の予定です。

# 図書紹介

ケニヤからキリ  
マンジャロへ

トリュフオ著  
近藤等訳

一九五二年八月アフリカの高峰ケニヤおよびキリマンジャロへのフランス遠征隊の報告である。報告といつても、いわゆる無味乾燥な論文調のものではなく、極めて興味ある読みものとなつてゐるのがこの本の特色といえるだろう。山の本といふものは、一般にいって山を知つてゐる人間でなければわからないような文句ばかり出てくるものだが、全く山を知らない人でもこの本なら最後まで一氣に読了するに相違ない。

一名の女性をふくむ八名のフランス登山隊がその第一の目的としたケニヤ北壁の初登攀の様子はサポートの隊が双眼鏡をもつてその行動を追ひながら克明に記してあり、さらにマルタンの手記と合せて要領よくまとめ上げられてゐる。

次いで一行は野獣の国アフリカの大草原を小型トラックで横断し最高峰キリマンジャロに登るのだが、この章も非常に面白い。われわれにとつてあまり縁のなかつた現在のアフリカの様子が生々しく描き出されてゐる。六〇—一〇〇米の最高峰ギボを持つキリマンジャロへの登山がいまでは登山路も山小屋も立派に整備されてお、一つの観光地となつてゐることな

ど私はこの本を読むまで知らなかつた。日本からも近くアフリカの山への遠征旅行隊が送り出されるという昨今、そういう意味でも一読の価値が十分にある。

昭和三十二年七月新潮社刊、一四三頁 写真多数、三二〇円

## 万年雪の王国

レビュファ著  
近藤等訳

先ごろ来朝したフランスの名クライマー、ガストン・レビュファの写真集である。訳者はその序文の中で次のように述べてゐる。  
『東京でのある日、ホテルの一室で、レビュファは百枚近いスライドを一枚一枚熱心に私に説明して、私をアルプスの高嶺に案内してくれたい。私はその素晴らしいスライドを見るにつけ、これらの写真は私一人で楽しむには余りにももつたない気がして是非日本に紹介しようと思つた。』

かくして平凡社の写真シリーズとして非常に美しいアルプスの写真集が目に現れたわけである。原色版八葉、黒白版三十二葉のアルプスの写真は極めてメカニク的な角度から山をとらえ、岩と雪と氷との世界に遊ぶクライマーの姿がスリリングに登場してゐる。山岳写真集としてはまさに異色篇といふべきである。そして、居ながらにして山登りを楽しめる書でもある。印刷も見事である。

昭和三十二年八月平凡社発行、四八〇円

## わが回想のアルプス

ギド・レイ著  
安川茂雄訳

ギド・レイは「アルピニズム・アクロバチコ」の中で親友ユークにあてて次のようにいつてゐる。  
『われわれがいろいろの登山をしてゐる間に、早や長い年月のあいだわれわれは二人ともさまざまな苦勞も、不快なことも、苦痛も味わされてきた。しかし連れだつて山嶺のほうに帰るたびごとに、わたしは眼をそれらの山頂に向けて、将来をば新しい信念をもつて眺めることが出来たのだつた。それは山岳がわれわれにその落着とその力を伝達したからであつた。』

「わが回想のアルプス」というすこぶるロマンチックな名前のつけられたこの書物も、ギド・レイのそうした山登りにともなつて自然に生れたものだといふ印象を受ける。「幼い日の山」「あるガイトの思い出」「モンテローザの一夜」「ある登山行」「海拔四五六〇メートルにて」「マッターホルンに挑む」「ひるさがりの山」「静かなる山」「つつましき山」「処女峰への」十章からなつてゐる本書は彼の代表作「アルピニズム・アクロバチコ」にみられる花かさはない。しかし山登りをその生涯の心の糧としたギド・レイの山への愛情がよくにじみ出している文章である。

訳者にとってはヘックマイヤーの「アルプスの三つの壁」「ランペールの山に斗う」について三冊目の訳書だが、前二者にくらべる

とこの三冊目のものは、もう少し翻訳にすいこを加えたならもつと読みやすくなつたのではないかと思う。

昭和三十二年七月三笠書房刊、二二三頁、写真五葉、二五〇円

## 山と書物

小林義正著

イギリスの書評に「ウェル・クオリファイド」という言葉をよく見かけるが、私はこの著者に対しても同じ言葉を用いた。著者は日本山岳会の会員であり、山の書物について豊富な知識を持つてゐる上に、さらに丹念に多くの事柄を調べてゐる。そして何よりも、それらの書物に対して非常な愛着を、多年にわたつて抱いてゐることを、恐らく、この本を手にした人々は直ちに感じるであろう。

内容は二部に分れてゐるが、第一部(十七章)には「本の蒐集」ということ」に始まり、「明治年間」の山の本」「江戸時代に山の文献を探る」が合せて六〇頁、「富士に関する古書」「富士山書目考」が合せて二〇頁にわたるなど、わが国の古い山の本について多く述べてゐる。私などは、外国の本の方が先になり、自分の国の山の本のことは、かつて小島鳥水氏の「山岳文学」中の「本邦の山岳文学」くらいしか読んではいかつたので、これらによつて新たに多くを教えられるのである。

第二部には外国の山の本のことが多く出て来る。「初期の「学鑑」から眺めた山の洋書輸入誌」(二二頁)「ウェストン以前の山岳関係英文図書」(一七頁)「ヒマラ

ヤ古文獻の小展望」(一八頁)にはじまり、「古書目録から」「東西山の限定版と特装本」「アルパイン・ジャーナルと日本の山」などの十五章があり、終りに「初期山岳関係主要図書目録」が附録として加えられ、八〇近い写真版が入つてゐる。

第二部では丸善の「学鑑」に記載された山の洋書の話をもつて先に読んだ。その中に「学鑑」第三号(明治三十年、一八九七)に、ウェストンの「日本アルプス登山と探検」のことが出てゐる。即ち、ロンドンで刊行(一八九六年)の翌年に既に入荷してゐるのである。そして小島鳥水氏が、この本のことを岡野金次郎氏から聞いたといふのが、その五年後の明治三十五年であつたと、その「アルピニストの手記」中に述べてゐる話や、(この辺のことは「山岳」第四十四年第一号の小島鳥水記念号中の岡野氏の執筆部分を見ると、一そう興味がある)フーカー、ヘディン、スタイン、ヤングハズバンド、シュラギントワイト、コンウェイなど深くわれわれの心に残る人々の著書も何十年も前に、いち早く「学鑑」に紹介され、また輸入されてゐることなどを、こと新しく興味をもつて読んだのである。また例えばヤングハズバンドの「ジ・ハート・オブ・ア・コンティネント」(一八九六年刊)は刊行後十年おくれた明治三十九年の「学鑑」で紹介され、また輸入もされてゐると出てゐるが、私自身、今自身、今になつてこの本が読みたくなり、ちょうどガストンの今年の古本目録に出てゐたの



で、早速、丸善を通じて頼んで見たら、売れてしまっていた。そして、五十年前、小学生の時に丸善へ注文しておけばよかった！ などと思つたのであつた。

近頃の人は、山へは登るが、あまり本は読まないときいているが、私の知っている人々は、若い人も、いずれも本を愛好している。「山」が先か「本」の方が先だったかの違いはあつても、それらの書物に親しむことによつて、山との交りも、ますます深くなつて行くようである。ただ楽しみというだけではなく、私の知っている人々の中にも、まず木暮理太郎氏が御手本を示したのだが、ヒマラヤを「垣間見た」ことさえないのに、あれほどの知識をヒマラヤについて持つている人がいるのは、全くそれらの本に親しんでいるからである。このようなことは、ここに繰返すまでもなく、小林氏が「自序」や「山と書物」などの章の中に十分述べているところである。

小林氏の「山と書物」は山岳圖書の解題だけではなく、山の本（山以外の本のことも、いろいろ出るが）を集める「アドヴェンチュア」について大いに書いている。それは「蔵書の行方」「再会の稀観音」「私の愛蔵本」「本の蒐集ということ」などであるが、私の持つているイギリスの刺しゅうの本は「エンプロイダリ」のアドヴェンチュアとなつていくから、確かにアドヴェンチュアといつて良いと思う。著者はまめに古本屋や古書展覧会へ出かけられるらしいが、著者が「丸善」の

人であるのも有利なことであらう。現在、本を集めることは、いふんなことではなかなかに困難であるが、この一書を傍におけば、それら多くの書物を備えつけていなくても、幾分か慰められる気持がする。それで、著者愛蔵の書だけではなく、他の著名な本の写真版もあつたら、それらの面影を出て来ることもあるだろうと慰めを出て来る。そのほか私の慰めをいへばヒマラヤの古文獻について、もつと多くを知りたいとか、限定版などと共に自家版のこともとか、図書目録と共に索引があつたらとか、別々の章にあることを一つにまとめた方が読み易くはないか、とかいふるあるのである。（田辺主計）

ヒマラヤ

—その探検と登山の歴史—

K・メイソン著

田辺主計共訳

望月達夫共訳

一九五七年七月築地書館刊行

A5 版本文三六頁、附録二頁

写真七七葉 定価一〇〇〇円

山登りらしいものを私が始めたのは、大震災の前の年辺りであるが、自然の成行きとしていつの間にか、ヒマラヤというものに興味を覚えた。それと共に当然、ケニス・メイソンという名前はその当初から、私の頭にこびりついて離れないものとなつてしまつたのである。それもそのはず、メイソンを編集長としたヒマラヤ・ジャーナルの第一巻が出たのが一九二九年（昭和四年）で、それは私が最後の学校を出た翌年に当り、メイソンはそれに「インダス

河の氾濫とシオクの諸氷河」というのを書いていた。

今度、田辺、望月の両氏の共訳で出たこのメイソンの「ヒマラヤ」（原書名、「雪の棲所」）は、世界の登山家達が、二十年前から待望していた本である。ヒマラヤの歴史が書け、探検や登山遠征に対する、公正な批判の出来る人はそうざらにはない。メイソンはそのさうざらにはない。メイソンは最高の権威と資格を持った人である。そして今度は、この権威ある本の翻訳者として田辺、望月のコンビを得たことは、日本の登山界にとつても幸運であつた。わが国にもこの本の訳者としての資格を、名実ともに具えている人は幾人かいたし、現在もいる。だが両氏は、その経験からいつても語学力からいつても、メイソンの著書に対しては最もうつつけの人々といえよう。

この本の内容は序文にもある通り、ヒマラヤとカラコルムを中心とした探検と登山の歴史であつて、パミールやヒンズー・クシュ、天山々脈等に関しては余り触れられていない。そしてまた当然とはいへ、一々の遠征についてもそう悉しくは書いてない。

例えば、シブトンを隊長とする一九三五年のエヴェレスト遠征の如きにしても、エヴェレストのことは書いてあるが、その他のいくつかの重要な初登頂のことには深くふれていない。従つてそれ等のことについては、その書いてある別の文献を読まなければわからないわけだ。

しては、最近では訳書を入れて、日本語のものが相当出ている。藤木九三（ヒマラヤ登攀史、二五年七月）深田久弥（ヒマラヤ三一年七月）田中栄蔵他（第三の極地、三一年一月）諸家（山岳、三二年六月）深田久弥（ヒマラヤ登攀史、三二年七月）訳さるべくしてまだ出ていないもの

James Ramsay Ullman: The Age of Mountaineering, Lippincott, 1954 これらの本にしても皆大筋が述べられていて、悉しいことについては、個々の最終文献が必要になることは同じである。それにしても、メイソンの最初にして最後（？）の著ともなるべきこの「雪の棲所」を読む場合には、この本をモノにすれば一ぺんに田辺、望月両氏のようなヒマラヤ通になれるのであるから、はじめからその心組みで取組んで貰いたい。まずアジアの地図、それからインド及びネパールの地図、出来れば各セクションの概念図などを左右に備えるべきである。そしてはじめてお眼にかかる山名、河川名、地名が出て来たら、必ずどこにあるかを地図の上で確かめていくことだ。

ただ読み過ぎてしまふだけでは何もならない。悉しく何度か読んだり、地図をみて行く内に、地理の試験ではないが、サトパントは、これはガンジスの源流、ガンゴトリ氷河の源頭附近、七千米をちよつと越す山、既登頂。クラ・カンリ、これはブータン北部。シャクスガム河、カラコルムの北側にある。ナムチャ・バル

ワ、ヒマラヤの一番東にある七千米、これについてはベリリーとかモーズヘッド等の名前が頭に浮んでくるようになれば、もうそろそろ一人前に近づいたということになる。

話は別になるが、この本を読んでもわかるように、一つの探検や登頂の成功というものが、決して自分一人、或いは自分等だけの力で完成するものでないということである。これは何も山登りや測量事業に限られたわけではないが。そういうことに関連して、一九三九年のウィースナーの、一九五〇年のエルゾグのアンナプルナ行等に対する、メイソンの鋭い厳し、また皮肉をも交えた批判などは、よくよく熟読が興味すべきであらう。

この本は一応、一九五三年のエヴェレスト登頂をもつて終つていゝる関係上、それ以後に訂正された高度とか、その後に登頂されたもの、踏査された地域の多くが記載されてない。だがそれ等は訳者が苦労して「注」を入れたり、増補しているのでもう安心して読める。だが無理にアラを探せば多少ないことはない。私の方の間違ひもあるかも知れないが、気のついたことを左に列べてみよう。

・六頁六行目の「自分の力と乏しい資源」の資源 (resources) は少し大げさで、(携行) 物資位の方がいいのではないか。

・シドニー・バツラードは、新聞放送関係者で結成した「外国人名の書き方統一小委員会」の決定に従い、ツをとつてバツラードとしたらどうだろう。同様にしてヴ、ヴ

イはブ、ビに統一した方がいい。  
 ・三十一頁その他のシラの高度は、目下最後の決定には至っていないようだが、矢張り二一、〇〇〇呎（約六四〇〇米）にしておいた方がいいと思う。七千米峰でないことだけは確からしい。  
 ・シナの地名は出来るだけ漢字にしたい。例えば八四頁のヤルカンド（葉爾羌）、トウルファン（吐魯番）、スーチョウ（肅州）の如し。  
 ・なお八七頁二行目の新寧府は原文をみて *Sining* となっているのだから、明らかに西寧府（青海省）の誤りである。

・五八頁後から六行目、ハローとアウフシュナイダーのキロン滞在を一九四四年としているがこれは一九四五年の一月から十一月までである。原書も違ふ。  
 ・一九三頁、最後から六行目、これからの出来事は「カ」が余計だ。  
 ・二四一頁、最後から二行目、フイツサーフーフトはホーフト。  
 ・二五二頁、最後の *Tenzing Norkhay* は *Norgay* の方が正。

・二五五頁、二行目、学生山岳会をアカデミツシェン・アルペンフエラインとルビがふつてあるが、これはメイスンの原文も間違っている。Akademischer Alpenverein が正しい。即ちルビとなるべきだ。ドイツ語の文法をそのまま英語にあてはめてはいけな

い。  
 ・二五六頁、最後から二行目、危険な箇所は注意深く記録され、はどうか。「充分注意し」だけでは如何。  
 ・二八六頁、五行目のウォグラム

はウィグラム。

・三四三頁、十行目のワイルド写真経緯儀はドイツ式にヴィルトとするのが本当か。

・四〇三頁、十行目、六十七日は六月十七日のミス。

・四三六頁通りにティツヒの西部ネパール横断旅行（一九五三年、初登頂もあり）のことを加えるべきだ。

・四三八頁、アピの登頂者が三人になつてゐるが、これは誤りではないか。登頂したとしても、それはバレンギー一人である。  
 ・その他、や、や字の上下が違つてゐるもの、ぬけてゐるもの等が十カ所位あるが、余り細かくするのでもやめておく。

最後に私の希望したいのは、ヒマラヤ及びカラコルムの大地図を附録としてつけること、歴代のインド総督（副王）並びにインド測量局長官の在任期間と氏名を表にしておいて貰いたかつたことだ。

読む上の利便さが一層増すからだ。だがこれは訳書である以上無理な注文かも知れない。

だが兎に角、これだけの本を、しかも英語というものはやさしいようでない訳すとなると難しい言葉なのだが、それを、訳し悪いところも簡単な見事な日本語に直し、スラスラと読ませてくれる返り、なかなかもつて大した腕だ。

まだまだこれから大した腕だ。い本は沢山ある。お二人の健康と健康に期待しつつ、この褒めたようなケチをつけたような妙な紹介文を終る。

昭和三十三年七月白水社発行 A 5 版、写真二十一葉、定価千円

## 会務報告

### 支部長会議

▽場所 本会図書室

▽日時 七月二十一日午後二時

▽出席者 別宮会長、松方、日高副会長、三井山梨支部長、織田山陰支部長、藤島越後支部長、木本石川支部（代理）理事折井、辰沼、金坂、山崎、野田、松丸、石坂、太田、評議員渡辺、藤木、成瀬、山日記委員春田、坂本、監事石原

▽議事および報告  
 一、レンジャーの件 事故のおき

た場合が問題となる。厚生省では高山植物の注意の程度でよいというが事故の起きた時の対策の方が重要だ。アマチュアはその種目に

関すること金銭をもうけてはならないので会の態度のきめ方もむづかしい。厚生省では山岳会が断つたというデマが飛んでいるよう

だが断つたわけではない。支部長の名で腕章をかりてやる程でよいのではなか。やりたいという人にはまかせたくない。悪用されるおそれがある。

一、山岳の件 石井画伯の画がおくれたので伸びてゐたが月末までには必ず出せる見通しがついた。

一、岳連の問題。

九月役員総会 十一日（水）

▽場所 本会図書室  
 △出席者 別宮会長、日高副会長、理事折井、太田、金坂、野田、辰沼、松丸、徳久、石坂、山崎、評議員中田、成瀬、入沢、

渡辺、監事石原、諸岡、関西支部梶本、阿部、高木

▽議事および報告

一、山岳五十一年度の件  
 二、ヒマラヤ委員会の件  
 三、パコダニア・ア・アンデス神戸大学遠征の件

四、秩父宮記念館基金寄附の件  
 五、アルピン・クラブ百年祭に横氏出席の件  
 北部九州支部発表会 日本山岳会北部九州支部は昭和三十三年七月二日発足した。同月正午から戸畑市中原西日本工業クラブで発表会をあげ、支部発足経過報告（橋本三八）支部規定、および役員決定、安川氏および横氏の祝辞があつた。支部長代理末松大助氏が就任、事務所は八幡市筒井通一末松産業内。

熊本支部発表会 日本山岳会熊本支部は七月十三日熊本県阿蘇郡一ノ宮町宮地青山荘において発表会をあげた。三十二年度役員として支部長北田正三、常務委員西沢健一、委員三谷孝一、王名金助、首藤宗利の各氏が就任。事務所は熊本市御幸町一九熊本県庁登山部内。なお翌七月十四日参加八名で阿蘇山横尾岳登山を行った。

石川支部新役員 石川支部では五月六日鶴来高校で支部総会を開き支部長池田知幸、常任委員長小林雄次郎、常任委員木本芳、芦原孝治、橋礼吉、溝地信夫、監事磯卵三郎、龜田与三次、顧問山口二郎各氏が選任された。

国体登山チーフリーダー決定 第十二回の静岡国体登山部門は、南アルプス前衛の山々で行われることに決定、地元関係者の努

力により準備を進めてゐるが九月六日（金）登山部門常任委員会の席上チーフリーダー六名を次の諸氏に委嘱した。

石田久夫、津田康祐、羽賀正太郎、村木庸益、仲西政一郎、沼倉寛二郎

海外登山審議委員会発足

海外登山審議委員会は九月十一日（水）開催の役員総会において次の諸氏を委員に推挙した。

委員長 別宮俊俊、委員 日高信六郎、松方三郎、横有恒、三田幸夫、今西錦司、成瀬岩雄、渡辺公平、入沢文明、堀田弥一、小原勝郎、望月達夫

海外登山審議委員会規定

第一章 総則（日本山岳会）  
 第一条 本会を海外登山審議委員会と称し事務局を日本山岳会内に置く。  
 第二条 本会は日本山岳会理事会の諮問に応じ、諸海外登山計画を審議しその結果を理事会に回答する。

第二章 審議事項  
 第三条 本会は第二条決定のために左の事項について審議する。  
 1 登山計画を日本山岳会研究部に調査せしめる。  
 2 隊長、隊員について。  
 3 渡航手続、出入国手続について。  
 4 資金並に外貨について。  
 5 其の他の事項について。

第三章 委員  
 第四条 本会には左の委員を置く。

委員長一名。日本山岳会会長これを兼務す。  
 委員は日本山岳会副会長、常務

委員は日本山岳会副会長、常務

理事若干名をふくみ、海外登山の経験、知識を有するもの並に登山界の状況に通ずるもの若干名をもつて組織する。

委員長は必要に応じ体育協会、官庁並に審議事項の關係者をオブザーバーとして出席せしむることが出来る。委員の任期は翌三月三十一日までの一カ年とし重任を妨げない。

第五条 本会委員は日本山岳会理事会において推挙する。

#### 第四章 機関

第六条 本会には必要に応じ委員長が招集してその議長となる。

第七条 本会は過半数の出席によつて成立し、委任状による出席を認める。

第八条 本会事務に關しては日本山岳会常任理事事務の委員がこれに當る。

#### 第五章 会計

第九条 本会の必要経費は日本山岳会から支出する。

#### 附則

第十条 本会は昭和三十三年九月十二日より成立す。

#### (三頁より)

に円い山塊をのせているように見えるが、それは実際には、そこから更に四〇哩も先にあるのだ。雪の山の距離感はそのように欺され易い。また、黒色のシンガラ山脈の上方、一〇〇哩を距てた遙か西北に、一群の美しい雪山が見える。その最高峰は恐らくカンチンジャンガと同じ位の高さだろう。そしてカンチの西方へ八〇哩は充分離れている。この二つの高峯群

の間には余り高い山は介在していない。その辺りで、ネパールヒマラヤは、チベットからネパールへ入るアルン河に低く流込んでいく。

フーカールの指摘するこの高峯こそ、その後二九〇〇呎の高度を記録された世界最高峯のエヴェレストであつたに違いない。フーカールのこの観測時代には、未だカンチンジャンガが世界の最高峯と思われていたのである。

フーカールは自然科学者であつて純然たる登山家ではない。しかしながら彼が残したネパール及びシツキム内での足跡は現代の入達でも仲々成し得られない程巾も奥も広いものである。そしてシツキムヒマラヤに關する緻密な觀察はまことに明確を極め、その記述は何度読んでも面白くかつ貴重なものである。

#### スイスだより

##### 今井友之助

八月一日待望のマッターホルンへ登りました。シャモニーに十三日間滞在しましたが、天候にめぐまれず、雪が落ちつくまで当分登れないというので、せめてマッターホルンの写真でもとりたいたと、ツェルマットへやつてきたのですが、こちらはまた連日快晴で、七月三十日にシュワルツ・ゼーとゴルナーグラートへ行き、三十一日に登り口の小屋ベルヴェデーレまで登つて泊り、思つ切つてサン・ギイドで登頂しました。川森夫人と二人です。明日サン・モリッツの美術館をみて、五日に巴里に戻り、伊太利に五六日よつて、八月

十六日夜東京着の予定です。  
(一九五七年八月二日、ツェルマットにて)

#### 富士山

##### 松方三郎

暑いので二度富士山にぬけ出した。一度は娘と息子とその友人達と一行八人吉田口から。一度は今年北大を出た石村という青年と二人づれ。小御岳からまつすぐ白石岳へ上るのは、夏ははじめてだったがよかつた。石村シェルバが背負子をかきつて、下りなどこつちが荷物なし、山登りはすべからうかあるべしと考へたが、担いだ方の石村青年も大いに楽しかつたと、これは本人の言だから間違いないとおもう。

富士にゆくとき亡くなつた田中晋雄を想ひ出す。石村青年同行のとき、水だけはと何彼と水分をたんまり担ぎ上げたが、最後にはその水を干すのに考へた位だつた。富士山で水攻めなんというのは、当節珍らしい話だが、それにつけても田中と西爪や大きな麦湯冷しの缶を、ぶらさげて上つたことが忘れられない。

(一九五七年八月十九日)

#### 大日小屋より

##### 富沢 盤

(前略) 現在小生も常住して小屋と周辺の整備にあたつています。天候は先日(七月十五日)の新道(みずがき山への)の時以来少しも恵まれず、早く夏雲の金峯の上を去来する日を、首を長くして待ち望んでいる毎日をこざいます。ではいつかの御再会を期待し



て擲筆させて頂きます。(三二・七・二八・沼井宛奥秩父大日小屋にて)

### おかしい「第三の眼」

「著者の言葉」の最後に本書の写真は誰々のものを借用したと克明に記されてあるのは、アルプスやヒマラヤの文獻にたびたびお目にかかる。ご丁寧なものは自分の女房の写した写真の借用にまで、感謝の言葉を述べているのも珍らしくない。これなど男尊女卑の——今時こんな言葉を使ったら怒られそうだが——日本ではチヨット異様に感ぜられないこともない。

今度「第三の眼」(ランパ著・今井幸彦訳)などという本が出た。舞台はチベットだから、面白いものに違いないだろうと思つて頁を開いて見たら驚いたことにはこの写真二十枚の内十一枚はマライニーの「Secret Tibet」のと全く同じではないか。途端に不愉快になつてそのままこの本は遠ざけてしまつた。早速訳者に聞いて見たら原書には写真は一枚もなく、写真に関してはすべて出版者に委せたのだとの話。

結局厳格に言えば、あの本はランパとマライニーの共著ということにならなければならないまい。もつとも、マライニーから判然、版權一切を買っている人は日本人にいのだからそれもおかしい話だ。

(32・8・31) (成瀬)



## NYLON TENT

SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO, KANDA. TEL (25) 6428

昭和三十二年九月廿五日発行  
 東京 都千代田区  
 神田 駿河台四ノ六  
 發行所 法人 日本山岳会  
 編集者 山崎 安治  
 頒価二十円  
 電話 神田(25)八九五二番  
 振替口座東京四八二九番  
 印刷所 株式会社 技報堂

# たかはし

名人気質の店

本店、四谷、大蔵省横入ル  
TEL. (03) 1912

支店 八重洲口第2鉄鋼ビル前  
TEL (03) 1560

カワミヤのアルパインソール

耐久・不磨耗・滑止

あらゆる点で NO 1

合資会社 代表 平林三郎

## ガワミヤ靴店

東京都大田区大森 8~3740

TEL (76) 5882



山男靴屋

法文急製作

登山靴 スキー靴

イキング靴

カタログ送付

体験二〇年

# PRICE LIST 進呈



## 登山とスキー具

# イワタ

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL (27) 7686

|                                                                                                                                                                               |                                                                                     |                                                                                       |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 秀                                                                                                                                                                             | 山                                                                                   | 井土                                                                                    |
|                                                                                            |  |  |
|                                                                                            | <p style="margin: 0;">Ski<br/>と<br/>山<br/>の<br/>用具</p>                              |  |
| <p style="margin: 0;">プ ラ イ ス ・ リ ス ト 進 呈</p> <p style="margin: 0;">電話 東京 (28) 8456</p> <p style="margin: 0;">中 央 区 八 重 洲 4 ノ 1</p> <p style="margin: 0;">東京駅・八重洲口ヤシマビル横丁</p> |                                                                                     |                                                                                       |